

〈第129回定期演奏会〉

Program Note

曲目解説「演奏をより深く楽しむために」

音楽評論家：東条碩夫



武満徹：系図—若い人たちのための音楽詩— (語りとオーケストラのための)

演奏会世界初演(英語版)：1995年4月20日 ニューヨーク(レナード・スラットキン指揮)

演奏会日本初演(日本語版)：1995年9月7日 長野県松本(小澤征爾指揮)

武満最晩年のヒューマンな世界

清純な少女の朗読と、やわらかい叙情的なオーケストラの音楽とで描き出されるこの美しい作品は、わが国が世界に誇る大作曲家・武満徹が、他界のわずか1年前に発表したものであった。

テキストは谷川俊太郎の「はだか」という詩集から、武満自身が選び、少女の一人称語りの形に再構成した6篇の詩——「むかしむかし」「おじいちゃん」「おばあちゃん」「おとうさん」「おかあさん」「とおく」からなる。「系図」という曲の題名が示す通り、この曲のテーマは「家族」である。人間にとり最も純粋なユニットである「家族」というものの素晴らしさを描いたもの、という意味の解説を、武満は自ら日本初演の演奏会のプログラム冊子に残している。

そして彼は音楽の「調性」(注)を、「音楽大家族の核に当たるもの」とも解釈し、

作曲家プロフィール



武満 徹

Toru Takemitsu, 1930-1996

1957年作曲・初演の「弦楽のためのレクイエム」がストラヴィンスキーから「あの小柄な男からこのような厳しい強靱な音楽が生まれるとは」と絶賛され、1967年には「ノヴェンバー・ステップス」が小澤征爾指揮ニューヨーク・フィルにより初演され世界的な反響を巻き起こし、かくて70年代以降の彼は文字通り世界屈指の現代音楽作曲家となった。文学や演劇、映画など、実に幅広い素養を備えた音楽家であった。

この作品の音楽をあたたかい調性的な響きで紡いだのだった。このような「調性」に対する問題意識は、若き日を欧州音楽界の「無調主義」の影響の中で送った作曲家にとっては、特別なものだったに違いない。「僕ね、このごろブラームスが好きになって、調性への興味も出て来ちゃって、危険なことだと思うけど、しょうがない」と苦笑交じりに彼が筆者に語ってくれたのは、すでに1975年の夏のことであった。その後1980年に初演された「遠い呼び声の彼方に」の調性の濃さに驚いた筆者が「武満さん、これはもうまさしく……」と問いかけると、彼は「そう、そう、まさにそれよ」と楽しそうに笑ったのだった。

音楽に「調性」があるうがなかるうが、独自の音の世界はいかようにも構築できる、というのが中期以降の彼の作風だったといえるかもしれない。それに彼は、若い頃からシリアスな現代音楽のみならず、映画音楽や劇伴奏音楽、軽いポップ的な音楽など、実に幅広い領域の音楽を手がけていたのである。

この「系図」は、ニューヨーク・フィルハーモニックの創立150周年(1992年)を記念して委嘱されたものだった。この楽団からの作曲委嘱は「ノヴェンバー・ステップス」以来2度目になる。「系図」の日本語版は、米国での初演後、岩城宏之指揮NHK交響楽団によりいち早く放送で紹介されたが、演奏会での公開初演は松本のサイトウ・キネン・フェスティバルで、小澤征爾指揮サイトウ・キネン・オーケストラと、(放送初演の際と同じ)遠野凧子(当時15歳)のナレーションにより行われた。武満の作品の中では、最も広く親しまれているものに属するだろう。

楽器編成

フルート3(ピッコロ、アルト・フルート持替)、オーボエ2(イングリッシュ・ホルン持替)、クラリネット4(バス・クラリネット持替)、バスーン3(コントラバスーン持替)、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、ヴィブラフォン、グロッケンシュピール、チューブラベル、サスペンド・シンバル、アンティーク・シンバル、タムタム3、スチールドラム、ハーブ、チェレスタ、アコーディオン、語り手、弦楽5部

(注)八長調、ト短調などといった音体系。20世紀前半以降にはこれにこだわらぬ作曲技法(無調主義)が流行し、先端的な現代音楽のシンボルのような存在となった。



マーラー：交響曲 第4番 ト長調

初演：1901年11月25日 ミュンヘン（作曲家自身の指揮）

マーラーの交響曲の中では異色の存在

マーラーの交響曲は、番号のついていない「大地の歌」を除き、10曲を数える（ただし「第10番」は未完）。その中でこの「4番」は「1番《巨人》」とともに最も短いものに属する（それでも1時間近くかかるのだが）。そして、最も叙情的な、比較的明るい曲想に富んだ作品と言えよう。楽器編成も他の交響曲と比較すると規模がやや小さく、トロンボーンとテューバがない。他の交響曲にしばしば現れるような、悲劇的な行進曲調の楽想も一切登場しないのだ。

マーラーは、ドイツの民俗詩集「子供の魔法の角笛」（少年の魔法の角笛、少年の不思議な角笛などとも訳される）を殊のほか愛し、それに基づき多くの歌曲を作曲しただけでなく、「2番」から「4番」までの交響曲にも取り入れた。この「4番」の第4楽章で歌われるのが、その詩集からのものである。

マーラーは生前、作曲家としてよりも指揮者としての名声が高く、その活動は非常に華やかであった。この「4番」は、1899年夏に着手され、1900年8月5日に完成されたが、ちょうどこの頃は、彼が名門ウィーン帝室歌劇場（現・国立歌劇場）の総監督として縦横に腕を振るい始めた時期であり、またその所属の楽員で編成されるウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の指揮者を、短期間ではあったが兼任していた時期でもあった。マーラーという人は、かなり精神的に複雑な、感性の極度に鋭敏な音楽家だったと伝えられるが、この時期の仕事への「ノリ」が、「4番」の音楽の形成にある程度は関係していたかもしれない。ただしそこは複雑微妙な性格のマーラーのこと、明るさの中にも「翳り」が、至るところに出て来るのである。

光と影の交響曲

第1楽章は、特徴ある鈴の音を交えた軽快な序奏で始まる。これはこの楽章で何度も繰り返されるが、マーラーはこれを「神々しく賑やかで、深く憂鬱な旋律」と語ったという。彼はこのような曲想の中にも憂いを感じていたのだろうか。テンポの動きは変幻自在。エンディングもやや民謡的でコミカルだ。

第2楽章には寛いだ諧謔的な性格があるが、調律を変えたソロ・ヴァイオリンのパートについては、マーラーはなんと「友人カイン（死神）が弾く」と注釈している。ここ

にも彼は、「死」のイメージを（ただし屈託なく）持ち込んでいるのだ。そして、こうも説明している——「私には、夢の中で花の楽園を歩いている時にも、突然それが悪夢に変わる瞬間がある。神秘と恐怖が、突然自分の音楽の中に入り込んで来るのだ」。

第3楽章は、マーラーが作曲した多くの緩徐楽章の中でも屈指の傑作であり、最も美しく安らぎに富んでいる。けれども、夢幻的な世界のままで終るわけではない。終り近く、突如として不思議な物凄い爆発が起こり、その中で第4楽章の「天上の歓び」の主題が予告されるという劇的な瞬間がある。

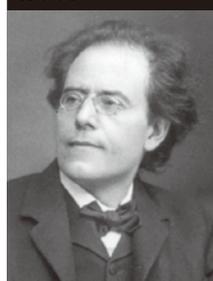
第4楽章は静かで平和な歌曲だが、この交響曲の頂点であり、解決点と言ってもいい。それまでと打って変わって解放されたような曲想が、清純なソプラノのソロと、柔らかい響きのオーケストラで、美しく流れて行く。歌詞は前述のように「子供の魔法の角笛」によるもの。「天国の聖ペテロが見つめる中、すべてが安らぎに満ちている」と歌われ、やがてあの第1楽章の鈴の音入りのモチーフが突然再現して、天上の幸せな宴の歓びが歌い継がれて行く。

そしてこのモチーフ（動機）が最後に再現されたあとは、曲想はやや落ち着き、天上の音楽の素晴らしさと舞踊の美しさが歌われるのだが、終結の「すべてのものが歓びに目を覚ます」の個所あたりから、不思議にも音楽は次第に下へ下へと沈んで行き、ついにはハーブとコントラバスの重い低音のみが残って消えて行くのである。歌詞の平安さに対して、この謎めいた翳りのある終り方を、私たちはどう受け取ればいいのか。ここにも、マーラーの作品の複雑な一例が聴かれる。

楽器編成

ソプラノ独唱、フルート4（ピッコロ持替2）、オーボエ3（イングリッシュ・ホルン持替）、クラリネット3（E♭クラリネット、バス・クラリネット持替）、バスーン3（コントラ・バスーン持替）、ホルン4、トランペット3、ティンパニ、大太鼓、トライアングル、鈴、グロッケンシュピール、シンバル、銅鑼、ハーブ、弦楽5部

作曲家プロフィール



グスタフ・マーラー

Gustav Mahler, 1860-1911

19世紀ドイツ後期ロマン派の潮流の中に生き、20世紀音楽との橋渡しをしたともいべき個性的な音楽家。ハンブルク歌劇場楽長、ウィーン帝室歌劇場総監督、メトロポリタン・オペラ指揮者、ニューヨーク・フィル指揮者などを歴任、周囲との衝突をも辞さぬ強い意志力で理想を追求し続けた。ウィーン時代の彼の実績は、今や同国立歌劇場における伝説となっている。大規模な作風を備えた交響曲は音楽史上の金字塔。